

平成 21 年度卒業論文

オスマン帝国におけるギリシア人教育と民族意識の形成

—19 世紀を中心に—

南・西アジア課程 トルコ語専攻
8506176 白石百合子
担当教官 新井政美

目次

はじめに	3
第一章 タンジマート期のオスマン政府の教育政策	5
第一節 国民教育綱領(Maarifi Umumiye Nizamnamesi)以前	
第二節 国民教育綱領以降	
1. 国民教育綱領	
2. その他の政策	
第二章 オスマン帝国におけるギリシア人学校	10
第一節 ギリシア人学校の変遷	
第二節 帝国内のギリシア人教育に対するギリシア王国の対応	
第三章 シロゴイ	15
第一節 シロゴイの活動	
第二節 ギリシア文芸協会	
おわりに	18
参考文献	20

はじめに

19 世紀はオスマン帝国にとって、改革の時代であった。17 世紀後半に徴税請負制が終身契約化されて以降、帝国ではアーヤーンと呼ばれる地方有力者が経済力と勢力をつけた結果、地方分権化が進んでいた。また 1699 年のカルロヴィッツ条約以降、軍事力での遅れを感じていたオスマン政府は 1768 年から始まった露土戦争での敗戦により、中央の求心力の回復と軍事的改革の必要性を同時に再確認することとなった。

そこでオスマン帝国内では地方分権化により失われていた中央の求心力を取り戻すべく、中央集権化を図る諸改革が行われた。地方分権化の原因であったアーヤーンたちは 1760 年代からアーヤーン職を大宰相による任命制にするなどの統制を受け、当時在地勢力化していたイエニチェリと並んで 1820 年代には中央の統制化に入った¹。

その後も改革はセリム 3 世、マフムト 2 世の主導により進められ、軍事改革を始め外務省、財務省、内務省の設置、また西洋をモデルとした法治国家を目指しフランスを模した刑法や商法なども新たに制定された。

またこの頃には新しいタイプの人材育成を目指し、帝国医学校や陸軍士官学校が設立され、官僚の教育のため留学生の派遣も行われた。この他にも、教育審議会の設置をはじめとしムスリム系トルコ人だけではなくキリスト教徒やユダヤ人など様々なコミュニティを巻き込んだ教育改革が行われた。

本稿ではそのような改革が行われた 19 世紀を中心に、帝国内のギリシア人の民族意識形成にあたり公教育およびその他教育機関がどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしたい。そのため第一章ではオスマン政府による教育政策などを取り上げ、当時帝国内のギリシア人を取り巻いていた環境や背景を見ていきたい。第二章では、第一章で触れた背景をもとに、実際にギリシア人学校でどのような教育が行われていたのかを考察していく。そして第三章では、ギリシア人学校とも密接な関わりを持っていたシロゴイの活動を扱いたいと思う。

オスマン帝国における非ムスリムのコミュニティやその役割などについては、Benjamin Braude 氏と Bernard Lewis 氏の編集による *Christians and Jews in the Ottoman empire*²で経済や政策など様々な面から論じられている。また佐原徹哉氏による『近代バルカン都市社会史』³ではバルカン都市の行政、言語、教育などが取り上げられ、ギリシア本国の教育についても触れられている。

アナトリアのギリシア人についての文献は、Gerasimos Augustinos の *The Greeks in Asia Minor*⁴

¹ 徴税請負制は 1839 年のギュルハネ勅令で原則廃止された。

² Benjamin braude & Bernard Lewis(eds.), *Christians and Jews in the Ottoman empire: the functioning of a plural society*, New York: Holmes & Meier Publishers, 1982

³ 佐原徹哉『近代バルカン都市社会史』刀水書房 2003(以下、佐原 2003 と略記)

⁴ Gerasimos Augustinos, *The Greeks in Asia Minor: confession,community,and ethnicity in the nineteenth century*, Kent State University Press, 1992.(以下、Augustinos 1992 と略記)

でオスマン帝国におけるギリシア人が歴史、行政、教育の面から考察されており、ギリシア人がアナトリア各地でどのような暮らしをしていたのかを知ることができる。

またギリシア人の教育に関する文献としては、Andreas Kazamias の *The Education of the Greeks in the Ottoman Empire, 1856-1923*⁵でギリシア人学校の組織としての仕組みや、シロゴイの活動、教育とヘレニズムとの関わりなどが論じられている。

⁵ Andreas Kazamias, *The Education of the Greeks in the Ottoman Empire, 1856-1923: A Case Study of 'Controlled Toleration'*, Januz Tomiak(eds.), *Schooling, educational policy and ethnic identity*, New York University Press, 1991(以下、Kazamias 1991 と略記)

第一章 タンジマート時代のオスマン帝国による教育政策

第一節 国民教育綱領以前

タンジマート期のオスマン帝国の教育政策に言及する前に、タンジマート期のオスマン政府の改革の全体がどのような方向性で進められていたのかについて触れたい。前述した通り、タンジマート期の改革は西洋を手本とした近代化による求心力の回復を目指したものであった。その中で特に強調されたのは、帝国内の人々の間での宗教的・社会的・政治的・経済的平等である。⁶帝国内の人々の間で平等を推進することにより、彼らが「愛国心という共通の結びつきにより統一される」⁷ことがオスマン政府の理想であり、それにより中央の権力を取り戻すことが目指された。

そのような枠組みの中で教育改革は、当時のオスマン帝国の公教育は伝統的なメドレセやメクテプで行われており、イスラム聖職者を指導者とした伝統的な教育が続けられていたため、近代化を図るオスマン政府によりその世俗化が試みられた。また一方で非ムスリムの教育に関しても、平等を推進するため 19 世紀後半には非ムスリムコミュニティの伝統的な特権であった、学校の設立、管理、運営が再確認された。オスマン政府はまた、新しい時代に合った人材育成にも力を入れ、1827 年に帝国医学学校、1834 年には陸軍士官学校が開設された。⁸その後、1838 年に公共事業委員会(Mecclisi Umuri Nafia)の教育改革案を基にした世俗の普通教育を目指したルシュディエ(Rüşdiye)の設置が決定され、これを統括する機関として中等教育省(Mekatibi Rüşdiye Nezareti)が設置された。しかしその案は 1850 年代になるまで実現化はされなかった。

本格的な改革が開始されたのは 1846 年に設立された国民教育審議会(Mecclisi Maarifi Umumi)以降となる。審議会はこの頃の学校数の増加や発展を受け、帝国の教育機関を新しく分類・構成することを取り決めた。⁹また同年に設立された公立学校委員会(Mekatibi Umumiye Nezareti)は、1830 年代に考案されていたルシュディエを各地に設置した。ルシュディエはムスリムの初等教育機関を卒業した者に向けた世俗的な中等教育機関として新たに設立されたものであったが、カリキュラムは算数、地理などに加え、アラビア語、トルコ・イスラム史、コーラン朗読(Kur'an-ı Kerim okuma)などといった宗教色を持つ伝統的なものとどまっていた。¹⁰ルシュディエへトルコ人だけでなく様々な民族の生徒が入学することに対して、教育委員会(Maarif Mecclisi)¹¹のメンバーの多くは好ましいこととして賛成を唱えていたが、宗教色を持つルシュディエがムスリム以外の様々な生徒を持つには多くの間

⁶ Kazamias 1991, p.347

⁷ Augustinos 1992,p.58

⁸ Augustinos 1992,p.145

⁹ Polat Haydaroğlu, *Osmanlı İmparatorluğu'nda yabancı okullar*, Kültür Bakanlığı, 1990(以下、Haydaroğlu 1990 と略記)

¹⁰ Augustinos 1992,p.147

¹¹ 教育委員会は 1864 年にアリ・パシャ、フアト・パシャにより設置された。

題を生じさせるとされ、¹²国民教育綱領以降もルシュディエはその数は 1870 年代まで著しく増えることはなかった。

1856 年に発布された改革勅令(*Islahat Fermanı*)では、教育に関しては非ムスリムの公立学校への入学許可、公立学校委員会の監視下のもとでの非ムスリムコミュニティによる学校の設立、管理、運営が再確認された。また同年には、混合教育委員会(*Meclisi Muhteliti Maarif*)が設立された。委員会は平等を期してムスリムと非ムスリムの代表から構成され、学校のレベル、カリキュラム、教師の選択などを検討した。また翌年の 1857 年には、国民教育審議会が国民教育省(*Maarifi Umumiye Nezareti*)に改編され、その後 1864 年にはオスマン主義者であるアリ・パシャ(*Ali Paşa*)とフアド・パシャ(*Fuad Paşa*)の提言により教育委員会へと再編された。

またオスマン政府はこの時期に新たな学校の開設も行っている。中級地方官の育成のための学校として、1859 年に行政学院(*Mektebi Mülkiye*)が設立された。また、1868 年に世俗の高等教育機関としてフランス政府を見本としフランスの専門家の助言を受けてガラタサライリセが開設された。これらの新しい学校の開設の目的は、佐原氏によれば、分離主義の温床であるとされる非ムスリムコミュニティの要求を満たすことでオスマン帝国の構成員という意識を持たせ、公教育を受ける権利を拡大し公務員への登用促進を狙った政策であったとされる¹³。ガラタサライリセではヨーロッパの教育学を参考としたカリキュラムが採用され、フランス人の指導員、またフランス語が指導言語として採用された¹⁴。設立当初は以下のように様々な民族や宗教の生徒が入学した：ムスリム 147 人、グレゴリアンアルメニア人 48 人、ギリシア正教徒 36 人、ユダヤ人 34 人、ブルガリア人 34 人、ローマカトリック教徒 23 人、アルメニア正教徒 19 人¹⁵。しかしその後すぐに、少人数制のエリート学校となり、生徒のほとんどをムスリムトルコ人で、その中でも社会的・経済的に高い階級の生徒から集めるようになった。¹⁶その背景には、ギリシア人も含め、非ムスリムがそれぞれのニーズに合ったコミュニティの学校に通うケースが多いこと、また当時民間レベルで活発化していたシロゴイの活動によりギリシア人の民族意識が高まっていたことが考えられる。

このように 1860 年代までのオスマン政府は教育に関する行政機関の整備や外国を模範とした新たな学校の開設など、公教育の世俗化へ向けた教育改革が徐々に進められていった。しかし政府による世俗教育の試みは非ムスリムには浸透せず、意図した通りには進展しなかった。また、非ムスリムの教育に関して具体的な取り決めがされたのは 1869 年の国民教育綱領(*Maarifi Umumiye Nizamnamesi*)が公布されて以降である。次の二節では、国民教育綱領の概要に触れながら、非ムスリムの教育に対するオスマン政府の政策を見ていきたい。

¹² Augustinos 1997,p.147.

¹³ 佐原 2003,p.139.

¹⁴ Augustinos 1997,p.147.

¹⁵ Kazamaia 1991,p.349.

¹⁶ Ibid.,p.349.

第二節 国民教育綱領以降

1. 国民教育綱領

1869 年に発布された国民教育綱領においても、それ以前にも試みられていた教育の世俗化は目指された。ムスリムと非ムスリムによる混合教育、イスラム聖職者を指導者とした公教育の世俗化を目指したものである。また、ムスリムと非ムスリムの教育を統括的に管理しようという試みも見られる法である。国民教育綱領では、国民教育省が取り決めた教育の段階化が具体的に明記され、定められた。

国民教育綱領でははじめに、学校が公立学校(Mekatibi Umumiye)と私立学校(Mekatibi Hususiye)の二種類に分類され、それぞれの運営について言及されている。ムスリムの学校である前者は管理と指導は政府に委ねられ、非ムスリムによる学校である後者は管理を政府に、運営は設立者である個人かコミュニティ(cemaat)に委ねられることが確認された。¹⁷

また学校の設置について、初等学校(sıbyan okulu)が街で一校以上は設立されることが規定され、男子は6歳から11歳、女子は6歳から10歳のすべての子どもに通学が義務づけられた。¹⁸またその学校はイスラム教徒のものと非イスラム教徒のものと一緒である必要はないことが記されている。また500軒を基準にルシュディエ、1000軒を基準にイダディエ(idadiye)を設立し、州都にはスルタニエ(sultaniye)、イスタンブルには大学が設置された。また、ルシュディエまでは宗教ごとの教育が原則的に行われており¹⁹、授業中に使用される言語もそれぞれのコミュニティの言語を使用することが公式に認められた。中等教育であるイダディエ、スルタニエ(リセ lise)については前課程を修了した者であれば、宗教に関わらず誰でも進学する許可が与えられた²⁰。しかしガラタサライリセの例で見たように、中等教育での混合学校の発展は芳しくなかった。²¹

非ムスリムによる学校である私立学校の教育に関しては、第129条²²で触れられている。

¹⁷ “Memalik-i Devlet-i Aliyyede bulunan mekatip esasen iki kısma münkasımdır. Birinci Mekatib-i Umumiye'dir ki nezaret ve emr-i idaresi devlete aittir. İkincisi mekatib-i hususiyedir ki yalnız nezareti devlete ve tesis ve idaresi efrad veyahut cemaata aittir”

(Hidayet Vahapoğlu, *Osmanlı'dan günümüze azınlık ve yabancı okulları (Yönetimleri açısından)*, Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü, 1990, p.79.) (以下、Vahapoğlu 1990 と略記)

¹⁸ 佐原 2003, p.256.

¹⁹ ムスリムと非ムスリムどちらも暮らす地域の場合は、100軒を基準に混合学校を開設された Vahapoğlu 1990, p.80.

²⁰ Ibid., p.81.

²¹ Kazamias 1991, p.357

²² “Memalik-i şahnade bu nevi mekteplerin tesisine evvela muallimlerin yedinde Maarif Nezareti canibinden veyahut mahalli maarif idaresinden şahadetname bulunmak ve saniyen bu mekteplerde adaba ve politikaya mugayir ders okutmamak için talim olunacak derslerin cetveli ve kitapların Maarif Nezaretinden veyahut mahalli maarif idaresinden tasdik edilmek üzere, taşrada ise vilayet maarif idaresiyle vilayet valisi tarafından ve Dersaadette Maarif Nezareti canibinden ruhsat-ı resmiye verilir” (Vahapoğlu 1990, p.96.)

そこでは非ムスリムの学校開設に関して、3点が規定されており、この3点全てを満たさない場合は学校の開設と存続の許可は与えられないと記されている。

- 1.教師は国民教育省または各地の国民教育省支部から認定書(şehadetname)を受けること。
- 2.学校が道徳や政治に反するような授業を行わないよう、行われる授業のリストを提出すること。また教科書についても国民教育省、あるいは街の国民教育省支部から許可されたものを使用すること。

3.1.2 の条件を満たし、地方では教育省支部と県知事の許可、また首都では国民教育省から許可を得ること。

このように、国民教育綱領でも指摘されている通り、政府は非ムスリムによる反政府的な教育を防ぐため、教師や教科書に政府の目が通るようにし、公立学校の開設を国民教育省の管理下に置いた。教師が求められた認定書は、1.学校長からの認可 2.街の国民教育局長が学校のレベルを決定 3.国民教育省の認可 という段階を踏んで与えられる。また、他の政府から認可された認定書を所有している場合も、再度オスマン政府から認可を受ける必要があった。²³

オスマン政府はまた、綱領の規定事項をそれぞれの学校に順守させるための機関も設置した。様々な都市の中心地に設置された教育委員会(Maarif Meclisi)はムスリムと非ムスリムから構成され、国民教育綱領および中央からの指令の順守、学校のあらゆる要望・出来事・問題を政府に報告すること、問題を解決すること、政府と地方のつながりを作ることが任務とされた。²⁴ポラト・ハイダルオウル氏によると、地方の教育委員会が実際に政府に提出した報告書で見られる傾向として、学校をより厳しい監視下におくこと、オスマン政府による教育の再調整、非ムスリム・外国人学校でトルコ語・オスマン史を必修にすること、トルコ人の学校に対する支援を増やすこと、ムスリム学校を増やすこと、教師の採用は慎重に行うことなどが見られるとされる。²⁵非ムスリムの学校では実際に 1894 年からオスマン・トルコ語の教育が義務化された。このようなことから現場の声である教育委員会と政府が非ムスリムに対してなんらかの対策が行われるべきだと考えていたという点で一致していたことがうかがえる。

以上のように、国民教育綱領では国民への義務教育の制定、学校教育の細分化、非ムスリムによる学校設立の条件などが規定され、この他にも進級のための試験導入、教師に関する条項なども記された。

²³ Ibid.,p.83.

²⁴ Haydaroğlu 1990,p.28.

²⁵ Ibid.,p.39.

2.その他の政策

国民教育綱領以降は、そこで規定された事項の再確認などがされた。1879 年には、非ムスリムによる学校教育に関して国民教育綱領の規定事項を満たした全ての学校は開設が許可されること、学校の運営に関する事項、教師になるための条件などが確認された。また 1896 年に発布された条例では、非ムスリムの学校開設の条件が再度確認されると同時に、非ムスリムの学校でトルコ語の授業が教育プログラムに導入された。²⁶また 20 世紀に入ると、非ムスリムコミュニティに対して、学校の教員のリスト²⁷の提出や授業内容を報告することが求められるなど、学校の教育内容にまで検閲をかけるような動きも出てきた。

このように国民教育綱領以降はその順守を確認する条例だけでなく、教科書や教員に対しても政府のチェックを入れるなど、19 世紀前半と比較すると非ムスリムの教育への政府の干渉は強まったと言える。またこの頃には教育だけでなく、ギリシア人の出版物に対しても検閲がかけられるなど非ムスリムの文化的活動に対する政府の懸念が強くなっていたことがうかがえる。しかし政府の非ムスリムに対する政策は必ずしも弾圧的なものではなく、各学校には政府から資金援助も行われていた。

次の第二章では、19 世紀の政府によるこのような教育政策の中、ギリシア人による学校や教育活動がどのようにされていったのか、またその内容がギリシア人の民族意識の形成にどのような影響を及ぼしていったのかについて考察していきたい。

²⁶ Vahapoğlu 1990,p.88

²⁷ リストには教員の名前、どの学校から認可状を受領したか、住所、オスマン帝国の市民であることなどを記すことが求められた Haydaroğlu 1990,p.60.

第二章 オスマン帝国におけるギリシア人学校

第一節 ギリシア人学校の変遷

ギリシア人によるオスマン帝国での学校教育は、メフメト 2 世が 1453 年にコンスタンティノープルを征服した後から始まる。メフメト 2 世は、ギリシア人に対して帝国内で制限内であればコミュニティを形成することを許可する勅令で約束し、その後ギリシア人が自分たちの学校を設立するようになった。²⁸しかし当初、コミュニティは民族的なものではなく、東方正教会という宗教を基にしたものであったため、ギリシア人を含む正教徒コミュニティは教会に付属する学校を設立した。学校の運営はコミュニティの責任者である聖職者によって行われ、東方正教徒としての基礎的な知識と価値観を身につけることが目的とされた。²⁹

ギリシア人が設立した最も古い学校は、16 世紀に建てられたフェネル・ギリシア人学校 (Fener Rum Mekteb-i) である。この学校は帝国内で学校が整備され始める 19 世紀にはトルコにおけるギリシア人文化の中心となり、その授業内容の充実さから地方からも裕福な家庭の子どもが通っていた。³⁰学校の教師は多くの場合牧師や教育を受けた修道士などの聖職者が行っていたが、教育現場が整備されるにつれ、教師も中等教育 (semi-gymnasiums、gymnasiums) や教師養成学校などで幅広い教科にわたる教育を受けた者が行うようになった。

非ムスリムによる学校は 18 世紀から拡大していき、19 世紀には多くの正教徒コミュニティが自前の学校を持つようになった。その数は 1869 年の国民教育綱領で非ムスリムによる学校開設に条件が与えられてからは落ち着くものの、20 世紀まで増加していった。セラニキ Selanik においては、1871 年の時点で 10 校だったギリシア人のルシュディエは 1898 年には 15 校に増えた³¹。またクレタ島においては、1881 年の人口調査によると、キリスト教徒 202,934 人のうち 13,971 人が何らかの教育を受けており、1901-1902 年にはキリスト教徒 269,948 人のうち 27,062 人が初等教育を、2,378 人がギムナジウムに通っていたとされる。総人口に対する教育を受けていた住民の割合は、20 年間で 6 パーセントから 11 パーセントに上がっており、その数字はフランスやドイツなどの西洋諸国に引けをとらない数字であった。³²ギリシア人による学校増加の裏には、ギリシア独立の気運から活発になっていったシロゴイからの支援や、ギリシア独立後にオスマン帝国内に設置されたギリシア領事からのギリシア人学校設立への支援が影響していたと考えられる。

また学校の数が増えていく中で、学校の質にも変化が現れた。1830 年のギリシア独立や 1870 年のブルガリア教会の独立などにより、コミュニティの基盤は宗教的なものから民族

²⁸ Vahapoğlu 1990,p.58.

²⁹ 佐原 2003,p.268.

³⁰ Haydaroğlu 1990,p.175.

³¹ Ibid.,p.102.

³² Kazamias 1991,p.357.

的なものへと徐々に変化が見られ、学校教育も民族的な世俗教育を模索するようになった。ギリシア学校の教育カリキュラムについては第一章で触れた通り、19 世紀の終わりに政府に授業内容などのリストを提出するよう定められたが、教育内容について厳密な指導などは行われず、オスマン・トルコ語やオスマン史などの科目はカラマンルが多く住んだカッパドキアを除いて、1894 年にトルコ語の教育が義務化されるまであまり教えられることなかった。非ムスリムコミュニティは希望する言語での教育が政府により認められていたため、正教会付属の学校ではもちろんのこと、近代になってからもギリシア語が指導言語として使用された。教育におけるギリシア語の重要性はギリシア正教徒の信仰を維持するために正教会から意識されていた。また近代になってからは、ギリシア・ナショナリストによってもギリシア人の民族的統一やギリシア人意識を形成する手段として重要視されていた³³ため、多くの学校でギリシア語や伝統文化に重点が置かれていた。初等教育(プロギムナジウム progymnasium、セミギムナジウム semi-gymnasium)ではギリシア語の授業に加え、リーディング、ライティング、算数、絵、縫い物、歌などが教えられた。また 19 世紀の終わりには全ての主要都市に設立されていた中等教育(ギムナジウム gymnasium、リセ lycee)では、一般的に古典ギリシア語、ラテン語、現代ギリシア語、歴史、宗教、数学、物理学、体育が教えられ、ギムナジウムではこれに加え、修辞学(Rhetoric)、哲学、心理学、フランス語なども教えられた。³⁴また 19 世紀半ばにハルキ Halki で開設された商業学校では、若い世代に世俗的なスキルを身につけさせるため、ギリシア語、カトリック教教義、歴史、地理学、オスマン・トルコ語、フランス語、イタリア語、カリグラフィー、ブックキーピングなど広範囲にわたる教科がカリキュラムに組み込まれるなど³⁵、地域や学校の方針によりいくらかの広がりを見せた。ギリシア語などの言語の使用は、他民族との違いを体感的に感じられるものであるため、教育においてその重要性が強調されることはギリシア人としての民族意識を高めることに貢献していたと考えられ、特にギリシア独立後は遠く離れたギリシア本国とアナトリアのギリシア人が持つ共通のツールとしてのギリシア語はギリシア人が同じ民族意識を持つ上で重要な役割を果たしていたと考えられる。このことは他の民族が民族教育を模索していく中で、自分たちの言語を教育で使用しようと試みたことから推測できるだろう。

帝国内での初等教育や中等教育は 19 世紀半ばには広く行われ、また 19 世紀後半になるとオスマン帝国初のギリシア人教員養成学校の開設や、シロゴイによる教員養成などギリシア人の間で教師の育成にも力が入れた。しかし高等教育の整備はギリシア王国と比較すると遅れをとっていた。そのためギリシア独立後はオスマン帝国内のギリシア人とギリシア王国との教育面での交流が行われ、帝国内のギムナジウムを卒業後、アテネなどの大学に進学する生徒も少なくなかった。ギリシア人コミュニティでは、奨学金を受け進学

³³ Kazamias 1991,p.347.

³⁴ Ibid.,p.360.

³⁵ Augustinos 1992,p.153.

した学生はその後出身のコミュニティに戻りコミュニティの活性化に貢献するということ
頻繁に行われていたため、ギリシアで教育を受けた彼らは教員などとして教育にもギリシ
ア的な要素を持ち込む役割を果たした。また、ギリシアから戻ってきた彼らの存在自体が
アナトリアのギリシアコミュニティにとってはいくらかの刺激になっていたのではないだ
ろうか。このようなギリシアコミュニティとギリシア王国との交流とそれが与えた影響に
ついては、次で見ていきたい。

第二節 帝国内のギリシア人とギリシア王国との関係

オスマン帝国でのギリシア人の教育は、ギリシアがオスマン帝国から独立した 1821 年以降徐々に変化が見られた。ギリシア王国の建国以降、メガリイデアやギリシア・ナショナリズムが広がりその波はオスマン帝国にも広がっていったからである。ここでは帝国内のギリシア人とギリシア王国との教育面での関係がどういったものであったのかについて言及していきたい。

ギリシア王国では早くも 1822 年に初等教育が無償で行われ、1833 年には 5 歳から 12 歳の教育の義務化が制定され、全ての自治体が小学校を開設するよう取り決められた。また、ギリシアでは 1830 年代に教員養成学校が開設されたこともあり、常に教師不足に悩まされていたオスマン帝国にはギリシアから教員が派遣されていた。こうしたギリシア人コミュニティに対する支援は 1840 年代からオスマン帝国内の主要都市に設置された領事を通じて帝国内のギリシア人に対する教育に支援が送られた。オスマン帝国のギリシア人コミュニティによる学校は、ギリシアにとってギリシア・ナショナリズムを広めるためのツールの一つとして認識されていたため、ギリシア領事は、学校建設への寄付、教師採用への便宜、また様々な学校プログラムを紹介するなどの支援を行った。³⁶またオスマン帝国に比べ整備された高等教育を持っていたギリシアには、教育や法学、医学を学びたい帝国内の学生が進学するなど生徒の行き来も行われていた。その中でもアテネの大学の卒業生はオスマン帝国のギリシア人コミュニティに影響を及ぼした。メガリイデア思想の中心地であるアテネで教育を受けオスマン帝国に派遣された教師たちは、自分たちを教育者であると同時に、ヘレニズム思想の伝達者として認識し、帝国内のギリシア人のナショナリズム的なヘレニズム思想を養うという別の使命を持っていると考えていた。³⁷メガリイデアのまさに震源地であるギリシアから派遣された教師はギリシア人コミュニティに影響を与えたと考えられる。黒海沿岸のヴァルナでは早くからギリシア人の教育活動が行われており、アテネの学校の卒業生が教師として迎えられ、教科書もアテネやイスタンブルから送られていた。またクリミア戦争後は学校組織やカリキュラムをギリシア内のモデルを模範に改革し、中等学校の卒業生の多くはアテネのギムナジウムに進学した。³⁸

また 19 世紀半ばには、アテネ大学を卒業したオスマン帝国のギリシア人がヘレニズム思想の伝達者としての役割を担うという風潮もあった³⁹。イズミルでは、アテネ大学で学んだ後帝国に戻ってきたギリシア人がギリシア学校や女学校を開設する例もあった。⁴⁰当時少しずつ出来始めていたコミュニティの民族的基盤は、ギリシアとの交流による外からの刺激

³⁶ Augustinos 1992,p.152.

³⁷ Kazamias 1991,p.363.

³⁸ 佐原 2003,p.285.

³⁹ Benjamin braude & Bernard Lewis(eds.), *Christians and Jews in the Ottoman empire: the functioning of a plural society*,;Richard Clogg,*The Greek Millet in the Ottoman Empire* New York: Holmes & Meier Publishers, 1982 p.198.(以下、Clogg 1982 と略記)

⁴⁰ Augustinos 1992,p.161.

によりさらに変化がもたらされたであろう。

このように、宗教的な教育が中心だった帝国内のギリシア人の教育内容はギリシア独立後のナショナリストの活動により刺激を受けた。また、ギリシアとの教育面での交流によってオスマン帝国内からも民族的な教育が行われるようになっていくなど内外からギリシア学校に少しずつ変化が与えられるようになった。

また、1860年代になるとギリシアからの支援は教育協会などを通じた間接的なものになっていった。シロゴイは市民への直接的な教育や、学校の設立など帝国内での教育で重要な役割を果たしていたため、ギリシア本国からもその重要性は認識されていた。

第三章 シロゴイ

オスマン帝国ではコミュニティによる学校のほか、民間の教育協会(シロゴイ)が活動を行っていた。シロゴイはギリシア人コミュニティの学校とも密接な関係を持ち、教育環境などにも影響を与えた。第二章では帝国内のコミュニティとギリシアとの交流という内と外の関係を見たが、第三章では帝国内のギリシア人の中で行われていたナショナリズム的活動としてシロゴイについて見ていきたい。

第一節 シロゴイ

オスマン帝国では、学校での教育のほかに様々な民族による民間の教育機関による教育も行われていた。これはギリシア人にとっても例外ではなく、ギリシア人はブルガリア人やアルメニア人の先駆けとして民間の教育機関を設立し、イスタンブールを中心としてイズミル、エピロス、トラブゾン、テッサロニキなど帝国のいたるところで開設した。ギリシア王国では、まだ王国が建国間もない時期にシロゴイにより教育への資金援助などの活動が既に行われており、その際にはオスマン帝国のギリシア人からの援助も行われた。このようなギリシア王国のシロゴイを倣って、オスマン帝国では 19 世紀半ば頃から本格的にシロゴイが設立され始めた。

シロゴイは、ギリシア人の教育レベルの向上を目的とするだけでなく、大人も対象とした教育を提供し、ギリシア正教徒の文化的アイデンティティやギリシア人としての意識を育てることが目標だった。また学校と比べより文化的・政治的な面を持っていたとされる。⁴¹彼らはギリシアの歴史、言語、文化に関する講座や、ギリシア本国との文化的接触、古代ギリシア作家の作品出版、図書館の開設といったことを通じてその目標達成を試みた。⁴²また教育協会は独自の出版物を出版することで人々の啓蒙を図り、読者に訴えかけていった。ムスリムと非ムスリムの知識人が設立したオスマン科学協会(the Ottoman Scientific Society)やギリシア文芸協会(the Greek Literary Society)などはその代表である。

また市民への直接的な教育だけでなく、教育環境の整備もシロゴイの重要な活動であった。学校の設立や教員育成所の開設、教師を目指す生徒やアテネ大学に進学する生徒に対する資金援助、また当時常に不足していた教員も帝国の様々な場所に派遣し、⁴³帝国内のギリシア学校拡大に大きく貢献した。カッパドキアでは、シナソス周辺のコミュニティの生徒も通えるような女子校を作りたいという住民の要望に対し、カッパドキア教育協会(Cappadocian Educational Society)は資金援助を行い、学校が軌道に乗った後も学校の維持と教師への丘陵のための寄付を行った。教育協会だけではまかなえない資金については、シナソス住民も資金を払っていた。⁴⁴このように学校と並んで教育を行い、学校と深い関係に

⁴¹ Clogg 1982,p.355.

⁴² Kazamias 1991,p.355.

⁴³ Ibid.,p.355.

⁴⁴ Augustinos 1992,pp.175-6

あったシロゴイに対し、ギリシア政府も注目し支援を送り始めた。アナトリアで活発に活動していたシロゴイの一つであるアナトリア協会(Society of Anatolians)は、その設立にあたりギリシアの銀行、アテネの自治体、大学からの支援に加え、ギリシアやエジプトの裕福なギリシア人からの補助金を受け 1891 年に設立された。彼らはアナトリアの若いギリシア人に対し教育を行うほか、出版物の発刊も行うなど意欲的に活動を行っていた⁴⁵。アナトリア協会のようにシロゴイはギリシアからの支援や資産家からの資金援助を受け、19 世紀後半には帝国内のいたるところで見られるようになった。1870 年代にはイズミルでは都市の労働者へ向けた夜間授業が行われ、またカッパドキアでは古代におけるカッパドキアの歴史やアルメニア語、オスマントルコ語、古代ギリシア史など 18 の様々な講座があった。⁴⁶ギリシア独立後も帝国内には多くのギリシア人が暮らし、経済的な理由からギリシア王国からオスマン帝国に移住することもあったため⁴⁷、彼らへの支援はギリシアにとって大きな意味を持っていた。ギリシア人コミュニティの教育への支援は領事を通じたものに加え、コミュニティの学校と密接な関係を持っていたシロゴイへの支援を通じても行われた。ギリシアからの支援やシロゴイの数はイスタンブルを中心に増えていった。1878 年の段階でイスタンブルだけでも 26 のシロゴイが存在していたとされ⁴⁸、その中でもギリシア文芸協会は帝国内に多くの支局を持ち、教育や教育環境の整備に貢献した。第二節ではこのギリシア文芸協会の活動について触れていく。

⁴⁵ Clogg 1982,p.197.

⁴⁶ Augustinos 1992,pp.181-2

⁴⁷ 特に多くのギリシア人が暮らしたイズミルでは、その人口は 1830 年に 20,000 人であったのに対し、1860 年には 75,000 人まで増加している。 Clogg 1982,p.195.

⁴⁸ Clogg 1982,p.197.

第二節 ギリシア文芸協会

ギリシア人によるシロゴイの中でも、ギリシア文芸協会（the Greek Literary Society）はオスマン帝国内のギリシア人の教育の点で最も活発に活動を行ったシロゴイである。ギリシア文芸協会は 1861 年に設立されたが、設立当時のメンバーにはオスマン政府の出版局長であるコンスタンティン・カリアディス Constantine Kalliadis やイスタンブルのギリシア大使である A. パライオロゴス A.Palaiologos も名を連ねており、ギリシア王国から多大な支援を受けながら活動の場を着実に広げていった。ギリシア文芸協会は他のシロゴイと同様、天文学や民俗学、言語学など様々な講座を通じて帝国内のギリシア人に対して教育を行った。スィミルナ、コンヤ、キプロス、カイロなどで既に設立されていたほかの文芸協会と緊密な関係を取り、イスタンブルの中でもベシクタシュ、カドウキョイ、ウスキュダル、ボアジチなど各地に支局を設立した。⁴⁹

ギリシア文芸協会は 1863 年には出版物を出版し始めるが、この頃から出版物を主な目標として捉え、隔月で 500 部を発行した。最初の出版物では、ギリシア王国は世俗的な公立学校を設立すること、また工業・農業物の推進するよう努力していることが記された。出版物の読者は無料で出版物を受け取っていた会員、年に一度の寄付を行っていた人々、また他のギリシアや外国の出版を行っていた編集者も読者の一人であり、出版物の交換も行われていた。また文学や歴史、人文の題目に沿った優れた書き物を提出した人には賞が与えられるなど、協会からの一方的な指導だけではなく、市民との相互的な活動も行っていた。⁵⁰

講座や出版物のほかにも、教師の派遣などにおいてイニシアティブを取り、200 校以上の学校を設立した。1871 年に文芸協会は定款を改定し、1873 年にイスタンブルの文芸協会、イピロス協会、トラキア協会による合同委員会を発足し、初等教育の標準化、教師養成学校の設立など帝国内のギリシア人教育の調整を担った。⁵¹

このようにギリシア文芸協会は特に出版物の発刊に力を入れ、発刊物を通じて人々への啓蒙を図った。またそれと同時に帝国内の支局を利用し、学校の設立や教育現場の改善に大いに貢献した。設立当初から会員にギリシアの政治家が含まれ、ギリシアから支援を受けていたこともあり、出版物の内容や学校の教育内容にギリシア的な思想が含まれていたことは確実だと思われる。しかしこのようなシロゴイの活動に対して政府から規制などはかけられておらず、19 世紀後半はシロゴイと学校によるギリシア人への教育は続いた。

⁴⁹ Vahapoğlu 1990,p.62

⁵⁰ Augustinos 1992,p.179.

⁵¹ Ibid.,p.179.

おわりに

本稿では、19 世紀を中心としたオスマン帝国におけるギリシア人の民族意識形成の一つの要因として、ギリシア人の教育についてその背景となるオスマン帝国の教育政策などにも言及しながら考察してきた。第一章では、タンジマート期におけるオスマン政府による教育政策について見てきた。教育改革では、その前半で教育に関する行政機関が整備され、後半では国民教育綱領により「ムスリムと非ムスリムの教育システムの一本化」⁵²が図られ、またその中で混合学校の試みや非ムスリムによる学校開設についての規定が加えられた。このような政府の教育改革は、帝国内のギリシア人の教育への意識を高め、シロゴイなどの教育機関の活動も活発化された。またこの時期には、めまぐるしく変わる世界情勢の影響を受け、教育の土台となるコミュニティにも変化が現れた。ナショナリズム思想や宗教的違いから、コミュニティはギリシア正教徒という宗教的なつながりを中心としたものから民族的なものに変化し、コミュニティの教育も宗教的なものから民族的なものへと徐々に変わっていった。

ギリシア人の民族的な教育の中で重要視されたのはギリシア語であった。アンドレアス・カザミアス氏によるとギリシア語は文化的統合や民族意識の目覚めにおいて重要な役割を果たしていたとされ、ギリシア王国内外のエリートナショナリストはギリシア語を重要視していた。⁵³ギリシア語はもちろんコミュニケーション手段以上の意味を持っていたが、ギリシア人の民族意識の形成において最も重要だと思われるのは、ギリシア本国とギリシアコミュニティ間の人の交流である。オスマン帝国からギリシアへ進学し、ギリシア・ナショナリズムの思想に触れた人々、またギリシア・ナショナリズムの伝道者と自負しギリシアから教員として派遣された人々など、ギリシア・ナショナリズムの思想は人々を介して帝国内に入ってきた。土台が変わりつつあったコミュニティの教育にそうした人々の意見が加わることにより、ヴァルナの例で見たように、ギリシア的なカリキュラムや教育体制が帝国内で見られるようになった。また二国を結ぶ彼らが所属したシロゴイも、彼らが持つ思想を広める手段だったという点では重要であり、その重要性からシロゴイに対するギリシア王国からの支援も行われていた。二国間を結んだ人々が帝国内のギリシア人に与えた影響は、教育だけにとどまらず、生活に密着した場面でも人々の意識に作用を及ぼしたことだろう。

19 世紀には印刷所の発展やギリシア語の新聞の発刊などオスマン帝国のギリシア人の周りには学校以外にも様々な要素があった。その中でギリシア人意識の形成にあたりギリシア人の教育が果たした役割は、ギリシア語やギリシア文化という共通のツールを人々に持たせ続けるという点であろう。しかし本稿では、教育を受けたギリシア人たちにより近づいた思想的な変化などについては見るができなかったことが反省点である。当時の

⁵² 佐原 2003,p.256.

⁵³ Kazamias p.363

人々による政治的活動なども考察することで、当時のギリシア人の思想に近づくことが今後の課題となる。

参考文献

佐原徹哉『近代バルカン都市社会史』刀水書房 2003

Andreas Kazamias, *The Education of the Greeks in the Ottoman Empire, 1856-1923:*

A Case Study of 'Controlled Toleration', Schooling, educational policy and ethnic identity, eds Janusz Tomiak, New York University Press

Gerasimos Augustinos, *The Greeks of Asia Minor Confession, Community, and Ethnicity in the Nineteenth Century*, The Kent State University Press, 1992

Richard Clogg, "The Greek Millet in the Ottoman Empire", Benjamin Braude and Bernard Lewis (eds.) *Christians and Jews in the Ottoman Empire, The Functioning of a Plural Society*, e, Holmes & Meier Publishers, 1982

M. Hidayet Vahapoğlu, *Osmanlı'dan günümüze azınlık ve yabancı okulları (yönetimi açısından)*, Türk Kültürü Araştırma Enstitüsü, 1990

Polat Haydaroglu, *Osmanlı İmparatorluğu'nda yabancı okullar*, Kültür Bakanlığı, 1990